

日本武道学会第 48 回大会
障害者武道専門分科会企画 シンポジウム



社会の進行と共に変わる障害者武道の明日を考える：
中学武道必修化で実現させるインクルーシブ教育

日 時：平成 27 年 9 月 10 日（木）13:00～
場 所：日本体育大学 世田谷キャンパス
教育研究棟 2 階 2206 教室
パネリスト：徳安 秀正（有明医療大学）
濱名 智男（日本文化大学）
久保山和男（日本体育大学）
松井完太郎（国際武道大学）
コーディネーター：森脇 保彦（国士館大学）

開催にあたり

森脇 保彦（国士館大学）

昨年のシンポジウムでは、障害者武道の先進国であるスウェーデンにおいて行なわれました「寝技キャンプ」に、武庫川女子大学の岡崎先生をはじめ 3 名の学生が参加され、その体験をとおして、海外ではどのように障害者武道が取り組まれているかについて、その現状報告をしていただきました。

2011 年に教育基本法が改正され、インクル

シブ教育が学校等で行なわれるようになり、いろいろな学校で多くの教員が大変なご苦労をされているお話を耳にします。

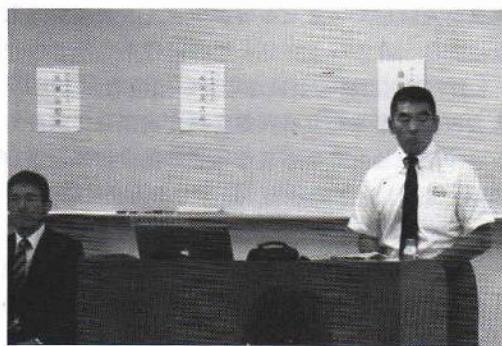
障害者武道が今後どのように貢献できるのか、今日は 4 名の先生方に「社会の進行と共に変わる障害者武道の明日を考える：中学武道必修化で実現させるインクルーシブ教育」をテーマに報告していただき、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

用語説明

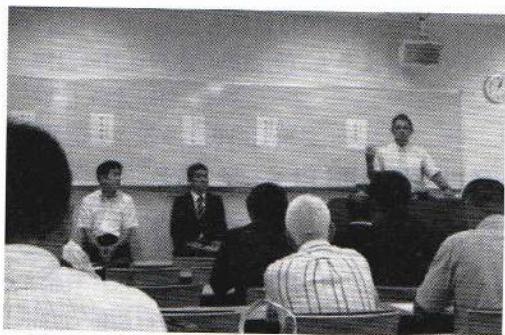
松井完太郎（国際武道大学）

最初に「インクルーシブ」という言葉について確認しておきたいと思います。

以前は、一般に「インテグレーション＝統合」という言葉を使っていました。しかし、2012 年に国士館大学で開催された Global workshop in Japan では「インクルーシブ」という言葉が使われました。一般に、「インクルーシブ」に言い換えられるようになったのは、統合＝インテグレーションは二つのことが別々に存在することを前提に、それらを一緒に行なうことを意味しているの



森脇保彦氏



松井完太郎氏

に対し、インクルーシブは、バラバラな個性を持つ人たちがそれぞれのクラスにおいて、お互いに配慮し場を共有していくことを意味するということからです。

われわれが、お互いの場を共有し、どのように一緒に学んでいくかということがこれから課題となります。では、このことを前提に、それぞれの先生方に報告していただきましょう。

Special Olympics

濱名 智男（日本文化大學）

昨年の障害者武道専門分科会において、Special Olympicsについて紹介させていただきました。

今回は、7月29日から31日アメリカロサンゼルスにおいてSpecial Olympicsが開催され、この大会の柔道競技に審判員として参加したときの報告をさせていただきます。

7月25日に、全体としての開会式がメモリアルコロシアムにおいて行なわれ、柔道を含めた25種目が実施され、156カ国6,300人のアスリートが参加していました。開会式は3時間にわたって行なわれ、今回で柔道競技は4回目の開催となりました。柔道のSpecial Olympicsは、世界45カ国で行なわれており、その中の22カ国から11歳から50歳までのアスリート101名が参加していました。Special Olympicsの特徴は、競技を行なうにあたり、性別、年齢、競技能力基準に沿って行なわれ、アスリートの可能性を最大限に發揮できるように、独自のルール、ディビジョニングを用いて行なわれているということです。

柔道の試合を安全に行なうために、ディビジョニングはとても重要になっています。

今回の大会のレベルは、1から3までの基準とされました。

レベル1 実力は、レクリエーションレベルの柔道家と互角である

柔道センスがあり、感、動きが良く、試合の作戦を立てることができる

コーチ、審判員のアシストが必要ない

レベル2 実力は、レクリエーションレベルの柔道家と乱取りができるレベルである

動き、リアクションができ、力があり、試合の作戦を立てることができる

コーチ、審判員のアシストが適度に必要である

レベル3 実力は、レクリエーションレベルの柔道家と遊びのような乱取りができるレベルである

動き、リアクションができるが、あまり力がない 試合の作戦を立てることが困難である コーチ、審判員のアシストが必要である

しかし、各国独自の判断で、今回はレベル5までの参加者がいました。ディビジョニング（クラス分け）、レベル分けの実際ですが、2日間かけて行われました。1日目は、係員、コーチが立ち会い、各国の申告にあったレベルを参考に、係員が実際にアスリートに会って、体重計に乗る姿を見て話しかけ、そのときの対応のようすからレベルを決めていました。選手は、にこやかにリラックスした状態でディビジョニングを受けていました。

2日目は、出場者全員が集合し柔道着を着用し、大会役員、われわれ審判員全員が実際にアスリートと接触して、さまざまな柔道の動きに似た遊びの運動を行い、運動能力、理解力を入念に審査し、レベル1から5グループに分け試合を行いました。

北京大会までの、ディビジョニングの資料を見ますと、一本背負投を掛け、受身をさせレベルを決めていました。しかしそれでは、アスリートは身構えてしまい、本来の力を発揮できないという

障害者武道専門分科会企画 シンポジウム「社会の進行と共に変わる障害者武道の明日を考える」

ことで、その後、柔道に似せた動きをさせ、レベルを決めていくものに変えており、すべてのアスリートに勝負するチャンスが与えられ、入賞できなかったアスリートも表彰台にあがることができるというシステムを活用しています。

今回、試合前には、デモンストレーションが行なわれ、Special Olympics では、ユニファイドスポーツというプログラムが実施されました。

ユニファイドスポーツとは、知的障害のある人と健常者が、日常からスポーツやトレーニング、競技スポーツに参加し、その経験を共有し、インクルーシブを促進していくというものです。これまでの世界大会では、取り入れられていませんでしたが、今後、柔道の形にユニファイドスポーツを取り入れていくことをめざしています。

今回、オランダチームによる「投の形」のデモンストレーションが行なわれ、取=アスリート、受=健常者で演武されました。

ユニファイドスポーツの目的は、地域のアスリートとパートナーが築く関係性をとおし、共生社会を拡大すること、また新しい友人関係を構築すること、さらにアスリートとパートナーがともにコミュニケーション能力を向上させることです。つまり、道場内ではチームメイト、道場外では友人であることをめざしていくということです。私は、これから柔道の一つのあり方として、講道館柔道の形にこだわらず、知的障害をもつ人が安全に挑戦できるものを、彼らとともに考えていくたいと思います。

今回の審判員は、ヨーロッパ諸国より、知的障害柔道に精通している、世界選手権大会経験者の5名、主管国のアメリカから5名、日本から私と神奈川県警察の山崎さんの合計12名でした。試合前に何度も会議を重ね、安全管理、ルールの申し合わせ事項など、さまざまな共通理解のもとを行なわれました。ルールについては、IJFの審判規定に則って行いますが、選手の安全管理上、選手に楽しく試合が行なわせることが何よりも大事だという趣旨のもと、細かな申し合わせが行なわれました。

競技による申し合わせ事項



参加者

- ①捨身技、関節技を禁止する
- ②両膝を畳についての背負投、巻込技を禁止する
- ③後襟、背部を持つこと、また頸部に過度のストレスをかけることを禁止する

このようにして、3日間、非常に和気あいあいとした試合が行なわれました。ほほえましい光景がみられ、全力で取り組むアスリートの熱意に、観客も感動し拍手がなりやまない状況で、心温まる試合でした。また、ボランティアの方々の行動も気持ちよく、ケガをしたときの医療体制も万全でした。

今回、日本からの参加はありませんでしたが、Special Olympics は世界に広がりをみせております。昨年の2014年に、神奈川支部で柔道競技が始まり、他の種目と同様に柔道も楽しめるようになりました。今年から、他の都道府県においても開催される計画があるとお聞きしており、近い将来、全国大会開催とともに、世界大会への参加をめざしていきたいと思います。今後、日本においても、Special Olympics を含む、知的障害をもつた人たちの柔道を活性化させ、彼らの自立と社会参加を促進し、お互いの生活や心が豊かになるよう支援していきたいと思います。

また、Special Olympics は、柔道の基本理念である「精力善用 自他共栄」につながるものがあり、これから柔道のあり方、可能性の拡大、柔道の価値を見つめ直す契機になるのではないかと思います。

東京都江東区立 A 中学校における
柔道指導
徳安 秀正 (有明医療大学)

①東京都江東区立 A 中学校について

今日ご紹介する東京都江東区立 A 中学校は、私が勤務している大学から徒歩 1, 2 分と近い所にあり、平成 23 年 4 月に開校しました。その際に、当時の A 中学校の校長先生が、大学に挨拶にこられ、柔道場を見学され、「なんてすばらしい柔道場なのか。先生方もしっかりされており、こんなすばらしい環境で、生徒に学ばせてあげることができないだろうか」というお話をされました。後日、正式に、大学の施設を使って是非とも生徒に柔道を学ばせてあげたい、また可能であれば、大学に勤める指導者の方に指導していただけないか、と協力要請がありました。

大学には、私ともう一人柔道の先生がおられ、平成 23 年度より柔道整復学科として協力することとなり、柔道の授業が行なわれるようになりました。

また平成 25 年度から、特別支援学級に所属する生徒に対しても、柔道の授業が始まりました。

② A 中学校の特別支援学級の生徒について

A 中学校特別支援学級に属する生徒の全員が軽度の知的障害者です。区立の特別支援学級に入学するには、IQ が 70 以上ないと入学ができません。IQ70 は実際にどのように決めているのかとお聞きしたところ、事前に区の教育センターで検査を行い、日常生活の動向をみて総合的に判断し、入学することができるかの判断がされているとのことでした。

③授業展開

A 中学校は（平成 26 年）、1 学年 2 クラス、特別支援学級は 1 年から 3 年まで合同で 1 クラスで、全体で 409 名の生徒がおり、年々生徒数は増加傾向にあります。

柔道の授業は、1 年生から 3 年生まで、1 学年男女 2 クラスに分けて行い、1 年間の中で 11 月は男子、12 月は女子、1 月は特別支援学級の生徒と分けて、授業を展開しています。授業には保健体育教員がかならず 1 名つき、本学の柔道専門教

員と一緒に授業を教えています。

はじめは、どのくらい生徒ができるのか、わからなかったのですが、保健体育教員と計画を重ね、危なくない、そして柔道が嫌いにならないように考えて行ないました。

柔道着の着脱から始まり、礼法、受身、体さばきなどを実施しました。そして、3 年生の最後には寝技の試合を行い、モチベーションを上げるようしました。

A 中学校の生徒はとても素直で、授業をスムーズに進めることができました。

受身の授業は、S 特別支援学校で行なわれている内容を参考に行い、一人での受身はおもしろくない、痛い、きつい、飽きてしまうという傾向にあるので、2 人組で行なうものを取り入れ、お互いに意見を求め合い、悪いところを注意し合い、2 人で高め合っていけるようにしました。実際、生徒同士で学び合うことで、効果がすごくあったと思います。

また、特別支援学級で実施した授業内容は、礼法、受身を実施、そして最後の授業に、本学にある柔道着を貸し出して、投技の習得と乱取りを行いました。江東区は、特別支援学級には、必ず介助員がつかなければいけないということで、4, 5 人の方が来られ、介助員でもできる授業内容を展開しました。

私が、A 中学校で普通学級、特別支援学級の生徒に柔道の授業を教えていえることは、素足で広い柔道場をすり足で歩く感触を味わう楽しさが体験できるということです。さらに、柔道はコンタクト競技なので、コミュニケーション能力、対人関係能力、理解力の向上などが身に付くのではないかと考えます。

A 中学校の特別支援学級の授業では、講道館や全日本柔道連盟の出されている指導法ではなく、私が自らスウェーデンに行って障害者武道、障害者柔道で学んだ指導方法を取り入れました。なぜかというと、普通の授業をやっていると、原因はわかりませんし、個人差はありますが、特に前方回転受身ができる生徒が少なかったのです。しかし、特別支援学校で障害者に教えた指導法で、

かみくだいて授業を行なうと、できるようになりました。

私は、S特別支援学校や、スウェーデンで勉強させてもらった指導法を、中学校の柔道授業に活かすことができたと思います。このA中学校での指導を経験して思ったことは、障害者に教えていた指導法は健常者にも適しているということです。

障害者に教えることができる指導者は、全国にどのくらいいるのでしょうか。普通に柔道の指導をされる先生方はたくさんおられても、障害者に柔道を教えることができる先生は少ないです。そして障害者を教えることができる先生がおられても、安全部が確保できる環境が整備されていないのが現状であります。

私も介助員やサポートする先生の協力がないと、一人では同じ内容の授業を展開することは無理です。やはり、補助、サポートしてくださる人、学校、家族の協力理解がないと難しく、このようなことが理解されクリアーになることで、武道(柔道)におけるインクルーシブ教育が可能になるのではないかと思います。

④まとめ

国連の障害者権利条約で、インクルーシブ教育は規定されています。障害者の有無だけでなく、どんな子どもでも、合理的な配慮を受けて、地域の普通学級で学ぶ権利があり、これから地域の普通学級はそくならなければならないと思います。今、インクルーシブ教育が実施されていないのが現状であり、今後、中学武道必修の中で、取り組む必要性のある重要なことだと思います。

〈質疑応答〉

松井

何かご質問はないでしょうか。

質問者A

福祉というと、スウェーデンやデンマークが浮かびます。

徳安先生ご自身は武道を学ばれて、またスウェーデンで感じられたことは、どんなことでしょうか。

徳安

日本で生まれた柔道は、今競技スポーツ柔道として発展しています。嘉納先生がつくられた柔道が、勝たなければいけない、メダルを取らなければいけない方向に走ってきており、海外では柔道を、理学療法、リハビリとして効果をもたらすことをキャッチして取り入れています。私からすると、日本で生まれた柔道が、欧米では競技でなく、いろいろな形で活かされており、すばらしいことだと思います。また、学ぶべきことがあると思います。

質問者A

海外の方は、武士道、武道精神をよく理解したうえで、それを行なっているのではないでしょうか。

徳安

日本人も武士道、武道精神はもっていますが、実際問題、日本は学校や家族の理解が少なく、ちょっとした壁があります。しかし、スウェーデンにはそういう壁がなく、前向きなところがあり、考え方の違いがあるように感じます。

質問者B

徳安先生が、健常者、障害者に柔道の授業を教えておられる中で、授業終了時に、修了証や励みになるようなものが出されていますか。

徳安

授業を行ったあと、普通クラスは自分たちがやってきた集大成に寝技の試合を行っています。障害者のクラスは、私が相手をして、習ったことが活かされているか先生と勝負してみようと言つて、私が投げられてあげることしか行なっておらず、修了証は出しておりません。

質問者C

特別支援学級の柔道実践で、先生が授業をされて、生徒さんの困ったことなど何かありませんでしょうか。

徳安

A中学校での指導では、困るようなことはさせない内容で授業を行いました。これもスウェーデンで学んだことなのですが、スウェーデンの先生は、いろいろの障害をもった生徒がいっぱい



質疑応答

るなかで、この方法はダメだと思うとすぐに内容を切り替え、いろいろな方法で次から次へと指導します。そういう部分を私も取り入れて行なっていました。

質問者 C

先生はしっかりとした技術、知識をおもちなので、そこまでできると思うのですが、そこまで達するにはどうすればいいでしょうか。

徳安

私はまだまだ未熟ですが、いろいろな所で学ばせていただき、いろいろなアイディアを学び、私流のオリジナルをみつけました。柔道はただ組み合っていてもおもしろくないので、条件（約束）をつけて、ゲーム的な形式で行い、楽しくやることを心掛けました。

このような指導方法は、S特別支援学校や、スウェーデンで学んだことです。このような情報を全国、世界の先生方と共有し合うことで、どんどんいいものができる、子どもから大人まで、健常者も障害者も柔道ができるようになるのではないかと考えます。

質問者 C

ありがとうございました。

質問者 B

先生は、これからさらに指導法を研究されていくと思うのですが、マニュアル本を作成し、配布することはお考えではありませんか。

徳安

今は、いろいろな先生方のアイディアを集めたいというのが本音です。最終的には、先生が言わされたとおり、マニュアル本が必要だと思います。マニュアルがあれば、普通学級に通う生徒や、子ども達にも適用できると思います。障害者にはさまざまなタイプの人たちがおり、誰に合わせて行なうのか、それは指導される先生の判断だと思うのですが、将来的には指導者マニュアルができればいいと思います。

質問者 D

松井先生にお聞きしたいのですが、われわれ教員はこんな指導法で、こんな成果ができたということを、他者と共有する場が少ない状況です。共有できるシステムを、日本武道学会やこの障害者武道専門分科会でベースをつくっていただけないでしょうか。言葉は悪いですが、人は報酬がないとなかなか情報を開示しないように思います。その報酬をどうセッティングするかという点が、一つの重要な要素ではないかと思うのですが。

松井

国際障害者武道協会をつくったときに、これから障害者への武道指導法アーカイブをインターネット上につくり、共有する場にしようとしました。当時、サーバーの維持管理経費が高かったのですが、それを出費する覚悟もしました。しかし、YouTube ができ、みんなが無料でアップロードし、無料で閲覧できるようになりました。どこかがセンターになり管理運営するのではなく、YouTube を起点にネットワーク化されたつながりのなかで、情報を共有する時代です。ですので、組織が中心となってデータベース化することには、労力や費用の観点から少し否定的に考えています。今後の社会状況などをみながら、情報の活用方法を考えていきたいと思います。

障害特性による柔道寝技合同教育の

可能性に関する報告

久保山和男（日本体育大学）

インクルーシブ教育を利用して、健常者の子どもと障害者の子どもが、寝技だったら安全に授業

のなかで一緒にできるのではないかという提案を発表させていただきます。

障害者のスポーツとは、もともと障害者のために特別につくられたスポーツではなく、健常者が行なっているものを障害者が行なうことが目的です。そのなかで、障害があるためにできること、スポーツ事故が心配な部分です。さまざまな障害のレベルを持った生徒が混ざっている可能性があるので、障害を悪化させるおそれのあるものは排除し、条件をつけて工夫して行なっていかなくてはいけないと思います。

柔道の競技では、さまざまな種類の投技および固め技が、有効に使用されています。また、競技にはルールがあります。これらの技やルールを単純化させる必要があります。

厚生労働省の認可団体である「日本障がい者スポーツ協会」は、障害者のスポーツの普及・振興を図るために、障害者スポーツ指導者の養成を行っています。ここで行なわれている指導者養成は、障害者の基礎的な運動能力を開発していくことにねらいを定めています。ここでは、遊びの形態を取り入れ（スポーツチャンバラなど）、安全に行なうことができる運動の指導法を指導者養成プログラムとして組み入れ、システム化して行なっています。

たとえば、コアキッズ体操（体幹トレーニング、横に転がる「えんぴつゴロゴロ」、背筋力を高める首を強くする「一人シーソー（うつ伏せ）」）や柔道の引きの運動で腹ばいに動く基礎トレーニングなど、道場を使ってできるものを、障害者スポーツ指導者養成プログラムに組み込んでいます。遊びの要素を取り入れ、運動要素とまではいえない日常生活での動作、武道に類似した動き、筋力トレーニング的に類似したものを取り入れています。そのなかで、受けと取りに分れて行なうことで、相手との協調性、攻撃性の抑制などを学ぶことができますし、遊びをとおして、人との関わりを学ぶことができるなど、さまざまなものを体験的に学ぶことが期待できます。

投技は、健常者でもはじめは頭を打ってしまう危険性があり、手をついてしまうケガや事故も考

えられます。しかし、寝技の場合には、基礎トレーニング、あるいは相手と呼吸を合わせた遊びのような形式で行なえば、転倒の恐れはありません。寝技は、一定のルールさえ決めて行えば、一般学級の教材として、健常者と障害者が一緒に行なうこととは可能ではないかと考え、武道教育における寝技の導入の提案をさせていただきます。

（質疑応答）
松井

スウェーデンに行ったとき、脳性麻痺で体に硬直がある方と本学の学生が寝技で勝負したがありました。学生は、脳性麻痺の方にしっかりと抑えられてしまうと、返すことができませんでした。

寝技で、健常者と障害者が共習するなかで、障害者が健常者に勝つ経験、健常者が障害者に負ける経験ができるとに魅力を感じました。脳性麻痺の方が、自分の障害を利用して勝つことについての可能性について、少しお話を聞いていただければと思います。

久保山
私は、保健医療学部のリハビリテーションにあります。さまざまな障害をもった方々がおり、その方々が競技を行なうには、競技レベルの設定が重要になります。

たとえば、肘の関節が硬くなる障害をもった人は、曲げ伸ばしができない困難があり、このような障害をもった人が、寝技で健常者を抑えた場合、しっかりとした形で抑えると、障害者を返すことができません。普段は、自分では自由に体を動かすことができないので、筋力以上の力を發揮して健常者を抑えます。

競技を医療的に結びつけていくことは、複雑で難しい問題はありますが、機能障害を利用して行なうことは可能なものがあると思います。

空手道のパラリンピック種目化から見た
インクルーシブ化の現実
松井完太郎（国際武道大学）

空手道が、今月末に東京オリンピック・パラリンピック組織委員会からIOCに、オリンピック

種目として推薦されることが期待されます。それがないと、来年の8月にIOC総会で空手道がオリンピック種目として採用されるか決まります。

さて、この空手道がIOCに推薦された直後となるであろう10月1日に、国際武道大学の主催で、空手道のパラリンピック種目化に関するシンポジウムを行います。実は、2020年の東京パラリンピックから、テコンドーがパラリンピック種目になります。空手道も、2024年に採用されるように、冷静に考えて実行していきたいと思います。

オリンピック種目としての空手道は、組手と形の両方の採用を考えています。ではパラリンピック種目としては、どのような種目・カテゴリーを設定し、どのように合理的な審判ができるのか、そこが課題となります。

たとえば、剣道の世界大会が日本で開催され、そのとき、なぜ日本人に勝たせるのかといわれました。日本人にはクリアーなことでも、海外の人にとってなぜかクリアーではなく、観客もなぜいまの打突は当たっているのに1本にならないのか、理解しにくい部分があります。空手道も同じように、外からみるとわかりにくくない部分があるかもしれません。オリンピック種目にするには、審判の判定が外からみたとき、わかりやすいことが大切です。

フェンシングは、当たるとランプがつき、ブザーが鳴り、観客にもわかりやすいです。やはりオリンピック種目にするには、空手道もわかりやすくなければならないと思います。

テコンドーは突きよりも蹴りが特徴です。欠損の部位によって3クラス、体重別に分けて行なっていますが、空手道は2010年に世界大会を行い、WKFはすごくおもしろいやり方で大会を実施しました。車椅子の障害の部の場合、細かくクラスを分けてしまうとクラスごとの参加者が少なくなってしまうので、ざっくりクラス分けして行なわれました。

すでに世界空手道連盟では、昨年ブレーメンで開催された世界障害者空手選手権大会で、障害に応じた加点システムを採用しています。さらに、柔道のSpecial Olympicsのように、機能テストを実施し、機能に応じたより細かい加点方式を採用するのがよいとしているところもあります。この方式は、加点によって障害・機能の差による公平を図る分、クラス分けをシンプルにでき、パラリンピックにおけるメダルの価値を維持することができるという効果もあります。また、形競技の採点には、体操競技のようなシステムで難易度などを考慮し、公平に点数をつけていくことが大切だと考えます。

ブレーメンで開催された世界障害者空手選手権大会は、世界空手選手権大会の直後に行われました。オリンピックのあとにパラリンピックが開催されると、世界のトップレベルの審判員が両方の大会で審判を務めることができる可能性があると考えます。

何かご質問はありませんでしょうか。

〈質疑応答〉

質問者B

障害者の競技に対する私の考えですが、公平であるよりも平等であることが大切ではないかと考えるのですが。

松井

私は、チャンスの平等さえあれば、結果の平等でなく、争いの扉を開いてあげることが大切で、それぞれの選手にそれぞれの学びがあればよいと考えます。

森脇

ご熱心なお話、ご発言ありがとうございました。本日発表してくださった4人の先生方には、拍手で感謝を申しあげたいと思います。

(報告作成 矢崎利加)